

CPD 研究の課題と視点 — 国内関連論文のスコopingレビューの試み —

橋本 鉦市¹⁾

Issues and Perspectives in CPD Research: A Scoping Review of Domestic Related Papers

HASHIMOTO Koichi

要 旨

本稿は、専門的職業の継続的な職能開発（CPD：continuing professional development）について、国内の関連研究論文を対象としたスコopingレビューを試み、国内におけるCPD研究の特質、課題、および分析視点を概観することを目的とする。

本研究では、国内の学術論文を幅広くカバーするCiNiiデータベースを利用し、「専門」「継続」「職能」「開発」の類義語・同意語などを組み合わせた複合的な検索方式を採用した。この結果、重複などを除外した105本の論文を国内のCPD関連論文として同定し、書誌情報や研究テーマの内容分析を実施した。

分析の結果、国内のCPD関連論文は年代を追うごとに増加しており、欧米と同様の傾向が認められた。分析対象とされた専門領域は、欧米文献の傾向と同様に、教育関連領域（ほぼ半数）と医療・保健領域（約4割）に大きく偏重している。具体的な職種では、教育関連では初中等教職員、医療・保健では看護師・保健師に関する調査・研究が非常に多いことがわかった。その一方で、他の専門的職業に関する研究は限定的であった。分析方法については、量的・質的・混合調査をあわせて4割弱程度にとどまり、ほぼ半数は文献や資料に基づいた調査研究であった。特に教育関連では、文献・資料研究や事例研究が多く、今後、量的・質的調査を増やす余地が示唆されている。研究テーマの内容分析からは、教育関連では教員研修と学校現場での実践や課題支援などが、また医療・保健では能力育成と実践的なプログラムなどが中心であることが示唆された。

結論として、今後は大学教授職や医師など、これまで手薄だった他の職種への調査研究を拡大し、職種横断的な考察につなげることが期待される。また、現状大半を占める文献・資料調査に加え、現場業務のリアルな実践や学習活動について、実証的な量的・質的な調査研究を進める余地が残されている。

ABSTRACT

This paper attempts a scoping review of domestic research papers on continuing professional development (CPD) for specialized professions, aiming to outline the characteristics, challenges, and analytical perspectives of CPD research in Japan.

This study utilized the CiNii database, which broadly covers domestic academic papers, employing a composite search method combining synonyms and related terms for “specialized,” “continuing,” “professional,” and “development.” This identified 105 papers as domestic CPD-related papers after excluding duplicates, followed by content analysis of bibliographic information and research themes.

Analysis revealed that the number of domestic CPD-related papers has increased over time, showing a trend similar to that in Europe and the United States. The professional fields analyzed showed a significant bias, similar to the trend in Western literature, heavily concentrated in education-related fields (nearly half) and medical/healthcare fields (about 40%). Regarding specific occupations, research and studies on elementary and secondary school teachers were very common

¹⁾ 放送大学教授（「心理と教育」コース）

in education-related fields, while those on nurses and public health nurses were very common in medical/healthcare fields. Conversely, research on other professional occupations was limited. Regarding analytical methods, quantitative, qualitative, and mixed-method studies combined accounted for less than 40%, with nearly half being literature or document-based research. Particularly in education-related fields, literature/document studies and case studies were prevalent, suggesting room for increasing quantitative and qualitative research in the future. Content analysis of research themes suggested that education-related studies primarily focused on teacher training, school-based practice, and issue support, while healthcare and public health research centered on competency development and practical programs.

In conclusion, it is expected that future research will expand to include other professions that have been underrepresented thus far, such as university professors and physicians, leading to cross-occupational analysis. Furthermore, while literature and document reviews currently constitute the majority of studies, there remains scope for advancing empirical quantitative and qualitative research on the practices and learning activities within actual work settings.

1. はじめに

本稿は、専門的職業の継続的な職能開発（CPD：continuing professional development）について、国内における関連研究論文のスコーピングレビューを試み、分析対象、方法論、分析結果などを考察し、国内におけるCPD研究の課題と分析視点について概観することを目的としている。

さて、CPDについては、橋本（2024）において海外における関連研究論文の（計量）書誌学的な分析を行い、時代、国、職種による特質を考察した。明らかになった点として、欧米におけるCPD関連論文数は、1990年代からCPE（continuing professional education）に関連する論文に代わって急増し、現在もなお増加傾向にあること、またこの背景として専門的職業は知識・スキルなど生涯にわたる開発と向上が必要であるとの認識の広がりがあること、などがわかった。しかし一方ではCPD研究は医療・保健と教育の分野に偏重していること、また米国よりも英国圏での使用が多いことなど、分野的、国別の相違も顕著であることも解明した（同、44頁）。しかし、こうした海外のCPD（研究）の国、時代、職種ごとの異同等は明らかになったものの、上記の調査研究ではデータベースの制約からわが国の文献・データは含まれておらず、日本のCPD研究の特質や諸外国との比較は考察できていない。

そこで、これまでの知見を踏まえつつ、本稿ではわが国におけるCPD研究について、論文レビューの1つであるスコーピングレビューの方法論を参考に、対象となっている専門領域、職種、課題などのほか、その分析アプローチなどについて考察を行う。

2. データと方法

近年、様々な文献レビューの方法論が開発・整理されてきているが、本稿ではスコーピングレビューの手法を参考にする。スコーピングレビューとは、関連文献を幅広く概観し、現在行われている調査・研究を網羅的に把握して、研究がされていない範囲（リサーチギャップ）を明らかにすることを目的としたもので、

医療分野を中心にその重要性が広まりつつある（沖田他2021、37頁）。この方法論は、2005年にArkseyとO'Malleyによって発案され、フレームワークやガイドラインなどが整備・更新されてきており（同上）、従来型の「文献レビュー（ナラティブレビュー）」と厳格なプロトコルとバイアスリスクのチェック、結果の統合・要約を行う精緻な「システムティックレビュー」との中間に位置するものである（友利他2020、70-71頁）。わが国でも、そのガイドラインの日本語訳版が公表されており（友利他2020、沖田他2021）、また近年、それに依拠した調査も増えてきている（吉田他2024など）。また欧米におけるCPD研究のスコーピングレビューとしては、Allen et al.（2019）などがある。本稿でも、このレビューの手法を参考に、国内CPD関連論文の考察を試みたい。ただし、利用する文献データベースと検索条件の制約などから、そのガイドラインに則った厳格な手続きや処理は行わない。

さて、利用した文献データベースは国内の学術論文と各種データを幅広くカバーしているCiNii（国立情報学研究所（NII）学術情報ナビゲータ）である。その「詳細検索」画面において、データ種別として「論文」を対象に「タイトル」による検索を行った。ただし、検索語については、「専門的職業の継続的職能開発」ではヒット件数は皆無であり、また「CPD」による検索では特定分野の専門用語などが抽出されるため、「CPD（専門的職業の継続的職能開発）」という用語を構成する「専門」「継続」「職能」「開発」それぞれの類義語、同意語などを組み合わせた検索を行った。具体的には、①「専門、継続」、②「職能、能力、資質」、③「開発、発達、成長、形成、発展、向上、拡大」という3語群を設定し、それぞれの括弧内の単語をかけた検索を行った（たとえば、「専門＋職能＋開発」など）。またこれらに加えて、「継続＋専門」と「CPD」（なお特定領域における専門用語（たとえば骨盤不均衡、コンニカルパドルドライヤなど）は除外した）も別途検索を行った。なお論文の内容分析を行うため、このほかの検索条件として「本文・本体リンクあり」、「論文」（紀要、学術論文に限定しない）、言語は「日本語」、期間は「1945～2025」年とした（2025年8月21日に検索・

データ収集)。

こうして検索・収集したデータから、重複する論文を整理し、学会・研究会などでの発表、予稿集、編集後記、行事の案内、説明・紹介などを除いた。さらに内容を精査して、専門職(専門的職業)に関連しない論文などを除いた。この結果、105本の論文を国内のCPD関連論文として同定し、発表年、分析対象(国、専門領域、具体的な職種)、分析方法、分析課題・テーマ、分析結果・成果、全文テキストなどを変数とするデータセットを構築した。

3. 分析結果

(1) 書誌情報と内容構成

まず、対象とした論文に関する書誌情報や内容構成などについてまとめておきたい。

①発表年

まず各論文の発表年についてみてみよう(表1)。CiNiiがカバーする学術雑誌の収録時点、範囲、期間などはそれぞれ異なることに留意しなければならないが、年代を追うごとにCPD関連論文が増えてきていることがわかる。この趨勢については、橋本(2024)で見たように、欧米におけるCPD関連研究の書誌学的分析と同様の結果であり、近年、CPD研究がわが国でも注目されるようになってきていることを示している。

表1 論文発表年

刊行年	論文数
~1999	5
2000~2004	6
2005~2009	14
2010~2014	19
2015~2019	28
2020~	33
合計	105

②分析対象の国

また、各論文で考察されている対象国の一覧が表2である。まず、日本を対象とした調査研究が7割を超えているものの、諸外国を対象としたものも少なくない。その内訳を見てみると、英国はCPDという専門用語が創案された国として論文数が多いことが指摘できる。一方で、米国はむしろ少ないと言える。この点についても、欧米文献の傾向と同様である。「その他」の国としては、韓国、中国、カナダなどである。

表2 分析対象の国

対象国	論文数
日本	76
英国	10
米国	4
複数	5
その他	10
合計	105

③分析対象の専門領域

次に、分析対象となっている専門領域についてみてみよう(表3)。ほぼ半数は教育関連領域であり、4割近くが医療・保健領域である。この点についても欧米文献の傾向とも同様であり、教育系と医療・保健系においてCPDのあり方が、国内外ともに長く問われてきたことが示されている。

表3 分析対象の専門領域

対象領域	論文数
教育関連	50
医療・保健	39
企業・技術・経営関連	12
制度・組織・複合領域・その他	4
合計	105

④分析対象の職種

さらに、具体的に分析対象となっている職種について見たものが表4である。わが国のCPD研究は教育関連領域と医療・保健領域に偏重しているが、その職種の内訳をみると、教育関連では初中等教職員に関する調査・研究が非常に多く、また医療・保健系では看護師・保健師などがその大半を占めていることがわかる。教育関連では高等教育レベルが少なく(大学教授は2本)、また医療・保健領域でも医師は1本と限られており、今後さらなる調査研究の必要性が残されていると言える。

表4 分析対象の職種

対象職種	論文数
初中等教職員	39
保健師・助産師・看護師	24
大学職員	9
企業・会社員	9
社会福祉士・介護福祉士	6
コメディカル	4
図書館司書	4
技術職	4
複合職種	3
大学教授	2
医師	1
合計	105

⑤分析方法

次に、分析手法について見たものが表5である。量的、質的ならびに混合的な方法を用いた調査分析はあわせて4割弱で、ほぼ半数は文献や資料に基づいた調査研究となっている。

表5 分析方法

分析方法	論文数
量的	18
質的	12
混合	9
文献・資料	51
事例研究	15
合計	105

⑥分析対象と方法論

以上、分析対象や方法論について見てきたが、分析対象についてどのような分析方法がとられているだろうか。それを示したものが表6である（セル内の数字は％）。

まず、教育関連領域と医療・保健領域はCPD研究の大半を占めるが、その分析方法には相違が認められる。教育関連では文献・資料研究が多く、また学校・大学現場やプログラムなどを対象とした事例研究も少なくない。その一方で、量的・質的ならびに混合的な調査研究はそれほど盛んではない。

他方、医療・保健では文献・資料研究も3分の1ほどを占めてはいるが、量的調査も多く、また質的な手法による調査研究も少なくない。

したがって、教育関連領域においては量的ならびに質的調査をより増やしていく余地が残されているとも言えるだろう。

(2) 研究テーマの内容分析

次に、国内のCPD関連論文は、どのような研究テ

マを取り扱っているだろうか。そこで105本の論文の課題設定や分析結果の内容（テキスト）を対象に、LDAによるトピックモデル分析を行った。利用したソフトは、KH Coder(3.Beta.07f)である。本研究ではトピック数を5とし、この5トピック内で高い確率で出現する名詞形単語のうち、それぞれ上位10語（確率）を表7に示した。また、表8は分析対象としている専門領域ごとにそれぞれの確率を示したものである（図1はその折れ線グラフ。なお「制度・組織・複合領域・その他」は論文数が限定的なため省略した）。

これらの図表には、専門領域ごとの論文が何を分析課題とし、どのような結果が得られているのかについて、それぞれの特徴と差異が明確に示唆されている。

まず専門分野ごとのトピックとして、「教育関連」領域では#2（教員、研修、学校、課題、支援、指導、実践など）が、また「医療・保健」領域では#3（看護、能力、保健、地域、実践、課題、育成、プログラムなど）が、「企業・技術・経営」領域では#4（専門、開発、大学、能力、組織、職務、研修など）が、他の分野に比べてそれぞれ高い確率であることが見て取れる。教育関連

表6 分析対象と方法論

	教育関連	医療・保健	企業・技術・経営	制度・組織・複合領域・その他	計
量的	6.0	28.2	25.0	25.0	17.1
質的	4.0	20.5	8.3	25.0	11.4
混合	12.0	5.1	0.0	25.0	8.6
文献・資料	60.0	35.9	50.0	25.0	48.6
事例	18.0	10.3	16.7	0.0	14.3
合計（実数）	100.0 (50)	100.0 (39)	100.0 (12)	100.0 (4)	100.0 (105)

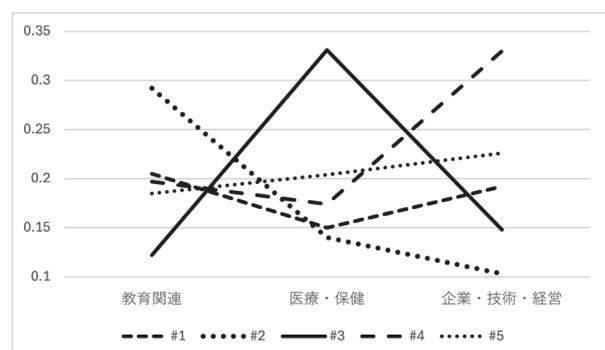
表7 各トピックにおける上位10語と確率

#1		#2		#3		#4		#5	
専門	0.25	教員	0.12	看護	0.12	専門	0.14	教育	0.34
教師	0.13	研修	0.09	能力	0.11	開発	0.11	学習	0.10
制度	0.09	学校	0.09	保健	0.07	大学	0.10	継続	0.08
団体	0.05	課題	0.06	研究	0.05	能力	0.08	社会	0.06
職能	0.05	支援	0.06	地域	0.05	組織	0.06	評価	0.06
学び	0.04	指導	0.06	実践	0.05	職務	0.04	技術	0.05
関係	0.04	研究	0.05	課題	0.04	研修	0.04	情報	0.04
支援	0.04	実践	0.05	育成	0.04	分析	0.04	分野	0.04
成長	0.03	教育	0.05	プログラム	0.04	調査	0.03	知識	0.03
経験	0.03	養成	0.05	経験	0.04	人材	0.03	資格	0.03

表8 専門領域別にみた各トピックの確率

	#1	#2	#3	#4	#5	ケース数
教育関連	0.21	0.29	0.12	0.20	0.19	50
医療・保健	0.15	0.14	0.33	0.17	0.20	39
企業・技術・経営	0.19	0.10	0.15	0.33	0.23	12

図1 専門領域別にみた各トピックの確率（折れ線グラフ）



では、教員研修を学校現場での指導、実践、課題などへの支援などに活用しようとし、また医療・保健では看護師、保健師などを中心とした能力の育成、地域における課題、それらに対する実践的なプログラムなどが重視されており、またそれぞれの分野で中心的なテーマとなっていることが示唆されている。企業・技術・経営では、専門的な職務能力を組織内での研修や大学で開発しようとする内容が示されている。

一方で、#1（専門、教師、制度、団体、職能、学びなど）や#5（教育、学習、継続、社会、評価など）は、どの分野でも一定の割合で共有されているトピックであり、CPD 関連論文で共通に扱われているテーマであることが示唆されている。

4. 考察—知見の整理と今後の課題

本稿では、スコーピングレビューを参考に、国内の CPD 関連論文について、その分析項目や対象ならびに方法論などを考察した。得られた知見をまとめておこう。まず、欧米の CPD 関連論文に関する書誌学的な調査結果と同様の傾向と特徴が国内の調査研究においても認められており、教育関連領域と医療・保健領域で CPD 研究が近年盛んになってきていることが明らかとなった。ただし、それぞれの領域では、調査方法や分析アプローチに相違が見られ、また教育関連では初中等教員を中心とした教員研修が、また医療・保健では、地域医療・福祉サービスにおける実践的な能力育成などが、研究課題として重視されていることも示唆されていた。

次に、こうした国内の CPD 研究の特徴についての考察を踏まえて、これまで手薄だった分析対象や方法論、また研究テーマについて整理しておきたい。まず、前述の通り、教育関連分野では高等教育機関における専門的業務に関わる職員層については調査研究が進められているものの、大学教授職自体についてはほとんど研究が進められていない。またこのことは、医療・保健領域の医師についても当てはまる。さらに、法務系では公認会計士などが分析されている論文も散見されるものの、他の専門的職業（弁護士など）は、今回のレビューでは皆無であった。初中等教員や看護師・保健師などの調査研究の成果などを生かしつつ、こうした他の様々な職種についても調査研究を行い、各職横断的な CPD の考察につなげることが期待される。

また方法論についても、量的・質的な調査研究は少ないものの、全体としては文献・資料調査ならび

に事例研究が大半を占めている。CPD の制度や政策などの考察がまずは進められるべきではあるが、より現場業務のリアルな実践や学習活動について、実証的な調査を進める余地が残されている。

最後に本稿でのレビューの限界に触れつつ、今後の課題についてまとめておきたい。まず検索語として、CPD そのものではなく類義語や同意語の組み合わせによる複合的な検索方式を採ったが、「熟達（化）」や「上達」などの単語は含めなかった。こうした語群を含めての検索の可否などについては、今後の課題としたい。また、構築したデータセットでは「解説」や「紹介記事」などは省いている。しかし、こうした論考は工学系、農学系などで少なくなく、したがって今回のレビューでは分野による偏りが生じていることもありえる。

こうした調査結果と課題を踏まえて、教育関連領域や医療・保健領域のみならず、他の職種における CPD 研究を横断的かつ丹念に涉猟し、調査・研究の内容や成果を深掘りして、CPD 研究のさらなる開拓を進めていきたい。

引用文献

- 橋本敏市 2024 「『CPD』研究についての探索的分析—関連論文の書誌情報を中心に—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 63 巻、37-46.
- Allen, L. M., Palermo, C., Armstrong, E., Hay, M., 2019, Categorising the broad impacts of continuing professional development: a scoping review, *MEDICAL EDUCATION*, 53: 1087-1099.
- 沖田勇帆・廣瀬卓哉・長志保・高瀬駿・岸優斗 2021 「JBI Manual For Evidence Synthesis: Scoping Reviews 2020. スコーピングレビューのための最新版ガイドライン（日本語訳）」『日本臨床作業療法研究』No.8 : 37-42.
- 友利幸之介・澤田辰徳・大野勘太・高橋香代子・沖田勇帆 2020 「スコーピングレビューのための報告ガイドライン 日本語版：PRISMA-ScR」『日本臨床作業療法研究』No.7 : 70-76.
- 吉田貴恵子・西村礼子・横山美樹 2024 「Learning Management System 利用の効果と課題に関するスコーピングレビュー」『日本看護科学会誌』Vol. 44 : 358-373.

(2025 年 10 月 27 日受理)